

## 中野重治と魯迅についての試論

— 竹内好と武田泰淳を介して —

土佐 圭司

はじめに

中野重治が魯迅について言及した文章は、『中野重治全集第二十巻』にて収録されており、全部で十四ある。本論文ではその中から「魯迅先生の日に」を中心に中野重治の魯迅観を検証することを目的とする。

中野重治についての研究の多くが時代性から考察することを中心としたものであり、プロレタリア文学との関連やマルクス主義からの転向を論点としているものが多い<sup>(1)</sup>。このような論点を提示した同時代評や同時代との人物における比較は佐々木基一、吉本隆明、亀井勝一郎、小田切秀雄、窪川鶴次郎、鹿地亘、小林多喜二、宮本顕治、宮本百合子、蔵原惟人らを中心としたものや、「政治と文学」についての荒正人、平野謙と中野重治との間に起こった論争に重点が置かれている<sup>(2)</sup>。また中野重治の作品として重視されているのは『甲乙丙丁』、『五勺の酒』、『梨の花』、『歌のわかれ』、『斎藤茂吉ノオト』、『むらぎも』等が挙げられるが、中野重治の魯迅観については先行研究で大々的に論じられておらず、同時代の日本人の魯迅観との比較やそれに関する第一次資料から

のアプローチが綿密に行われていない部分が多い。本多秋五は『第三版 転向文学論』の中で、中野重治と魯迅の両者について言及しているが、直接比較して論じられたものではない<sup>(3)</sup>。また汾浩介は堀田善衛を論点として挿入し、中野重治と魯迅について言及している。その中で中野重治と魯迅の作品における相違点として両者の作品へのまなざしと文学者としての差異を論じている<sup>(4)</sup>。引合いに出された堀田善衛本人は中野重治『梨の花』と魯迅『故郷』を比較し、中野重治と魯迅の文学者としての生い立ちに着目し二つの作品における成立の相違点を生まれ育った環境から考察をし、中野重治における文学の始点を『梨の花』だとしている<sup>(5)</sup>。河口司は転向という文学における現象について海外の文学に注目し、ロシア文学におけるドストエフスキーの正当な評価が日本国内では看過されており、また中国においては魯迅の評価は高いのだが、拮抗する形で存在していた郭沫若に対する評価の低さを指摘し、日本文学における評価は「倫理的」な部分を軸にしていることを指摘している。これを踏まえて河口司は中野重治の文学が文学史上においての評価を問う時に一方的な側面のみで位置付けられないことを論じている<sup>(6)</sup>。藤森節子は魯迅の書簡にての中野重治について言及し、魯迅の視点から中野重治を論じようとしており、さらに中野重治の転向について、その心境に焦点を当てている<sup>(7)</sup>。竹内栄美子は中野重治の「中国の旅」、魯迅関係書籍を中心に中野重治の魯迅論を独自の視点でアプローチしており、『中野重治全集』から引用をして分析を試みている<sup>(8)</sup>。総じて先行研究での中野重治と魯迅との比較研究は手薄な部分が多く、今後さらに深い研究を行う余地があると言える。本論文では、中野重治の魯迅受容の尺度として竹内好と武田泰淳の二人における魯迅観を介して考察を試

みたい。それにより中野重治の文学者としての再評価を試みる。

## 本 論

「魯迅先生の日に」は一九四九（昭和二十四）年に『新日本文学』（第四卷第十一号、十二月一日発行）の十二月号に発表されたものである。中野重治が四十七歳の時のものである。元来、この論文のタイトルは論文のベースとなった講演「魯迅精神と日本文学」（一九四九年十月一日 明治大学講堂にて中国留日学生同窓会、中国研究全国学生連合会、明治大学東洋思想研究会共催「魯迅祭」において）があり、論文もこの講演を活字として上梓したものと判断できる<sup>9)</sup>。

まずテキストの冒頭で中野重治自身の魯迅認識について語り、深い魯迅への畏敬を表すと共に、日本の文学者は魯迅について言及しなければならぬという責任があると断言している。それは日本の帝国主義が魯迅という偉大な文学者の誕生に関与することを中野重治は指摘し、魯迅を考へることは日本の帝国主義自体を考へることに繋がることと論じている。その部分を引用しておく。

もともと、魯迅先生のような方について語るには、語り手自身偉大でなければならぬでしょう。私どもは決して偉大ではありませんし、いままでも、多くの魯迅研究の先輩たちから学んできたものがあり、むしろこれからこそ魯迅を勉強して行こうとしているのですから、私自身、きょうここで、魯迅精神について多く語ることで、まきぬのを恥かしく思います。ただ私は、ひとりの日本人として、ま

た日本文学を仕事とするものとして、多かれ少なかれ魯迅について自己の考えを持たねばならぬ、またそれを持つ義務があると考えられるものの一人です。なぜかと言いますと、魯迅は偉大な中国革命の生み出した作家ですが、若かつた先生を革命の方へ、また文学の方へ押しやつたものは、直接には、中国にたいする日本帝国主義の魔の手、ほかならぬわれわれの国の侵略と圧迫との手であつたからです<sup>10)</sup>。

この文章を解説する前提として、同時代における日中の文学状況を考慮する必要がある。「魯迅先生の日に」からは、中野重治の魯迅への深い畏敬が感じられるが、それは近代中国において魯迅が一貫して「抵抗」する姿勢を示し転向をしなかったことに対する所以である。また、中国では日本の侵略があつたために文学においても「抵抗」することが日本の文学における状況と異なるため、それが容易であつたと言える。しかし、日本は同時代に大陸への侵略をしていたために、大陸侵略を肯定し、戦争には勝利しなければならぬという世相における国民意識と日本という国家があり、それに対して文芸や文学において「抵抗」をすることが困難であり、結果として当時における日本の作家は転向を余儀なくされた。つまり、中国と日本の同時代の差異をこの観点から認識することが可能となる。

以上のことを踏まえて、「魯迅先生の日に」で中野重治が指摘した点は大きく分けて三つある。

最初の論点として日本における魯迅研究は個々における研究が独立した形式で成立しており、その点では個々の研究を結合させていくべきだ

と中野重治は述べており、日本の大陸侵略についての一方的な帝国主義支配への反省点を、魯迅文学を介することにより学ぶべきだと指摘している。

次の論点では魯迅文学の普遍性が革命を意識しており、魯迅が様々な面で社会的不可抗力から「たたかう」姿勢を示しており、魯迅文学が人を惹きつけてやまない理由をそこに依拠すると指摘し、魯迅の文学から恣意的にそのような精神を受け取っているならば何らかの形で読者自身も社会的改革に参加する必要性や社会問題への意識の向上がはかられることを指摘している。

最後に短編小説『故郷』において流布する作品観念である美しい故郷を讀者なら誰もが思い描けることから、仮に故郷が衰退しているなら自分自身が改良に加わろうという意識を喚起させられることを指摘している。これらの魯迅の精神における成立は帝国主義的支配からの抵抗であり、その姿勢は祖国の完全な独立、祖国の民主革命の完全な徹底へと向かうものである。そして、その姿勢は日本における当時の現状から分析して、日本人も学ばなければならない姿勢であると中野重治は指摘する。ペネディクト・アンダーソンは『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』<sup>①</sup>で国家とは国民が想像することのできる範疇としての共同体であり、国民の意識において帰属意識とは想像された国家であるとした。魯迅の『故郷』における読者の意識を自らの故郷に導入することとは、その点で近代ナショナリズムにおいて、合理的な意味合いを表している。魯迅の『故郷』という作品がもつ意味として、単に郷愁を促すだけに留まらず国家と国民という観点から考察することが可能であり、それ自体に大きなテーマを孕んでおり中野重治はそのような点で社会体

制、国家への抵抗を文学において行うことを魯迅から精神的な側面で受容していたと考えられる。

要約すれば上記の三つの論点は中野重治の魯迅観を端的に表していると考えられる。中野重治の作品の特徴は先行研究が重視してきたような、社会体制への辛辣な批判や、マルクス主義からの転向であることは前述した。つまり、その点を考慮して中野重治の作品を捉えると、文学への姿勢や意識が魯迅精神ないし、魯迅文学と相通じる部分が多いことが指摘できると思われる。さらに魯迅の『故郷』と、その作品観念について述べた中野重治の論点は、両作家における共通点である社会体制への批判という形で表出し影響関係があると言える。魯迅のマルクス主義への傾倒や転向における具体的な論考は本論文では詳述しないが、中野重治の魯迅受容が同時代の文学者との間にどのような共通点と特徴があったかをここでは論じていきたい。

竹内好は自らの著書『魯迅』<sup>②</sup>で決定的な魯迅論を展開した。竹内好は魯迅精神として根底に「掙扎」という用語があることを指摘し、その解説を以下のように展開した。

彼が好んだ「掙扎」という言葉が示す激しい悽愴な生き方は、一方の極に自由意志的な死を置かなければ私には理解できない。魯迅は一般に、中国的な文学者と見られている。中国的というのは、伝統的という意味だと思いが、もし反伝統的をこめて、中国的を否定するのめまた中国的であるという意味にとれば、私もこの説に異議はない。それと、彼が攻撃した小品文派のこと、および彼の思慕した魏晉文人の生活などを考えあわせると、やはりそれは中国人

の知慧と呼んでいいものかもしれないという気はするのである<sup>13)</sup>。

竹内好は魯迅の精神が中華思想を超越し、近代において本当の意味での自己更新を図ろうとしているものであることを指摘している。竹内好の魯迅受容は近代の本質を抉りだすことを意味し、東洋における近代化における欠陥を浮彫にしたと言える。詳述すれば近代化する過程で東洋でも中国は近代化へ抵抗する姿勢が存在していた。しかし、日本は中国と異なり近代化<sup>14)</sup>を一方的に受容することしか出来ず、内部におけるアイデンティティの構築が外発的であったことが指摘できる。魯迅は中国と日本の二つの国における近代化における双方の欠陥を否定し、東洋の近代化が果たせないのは個人においての精神の確立であり、人間としての自己更新をするべきだとした。竹内好はこのような魯迅の精神をその本質とかなり接近した形で受容していたと考えられる。竹内好は中野重治については以下のように言及している。

中野の本質はナロードニキであると思ふ。日本のナロードニキを伝統化することが彼の実践目標である<sup>15)</sup>。

ナロードニキが意味する共同体社会主義思想から、中野重治の文学における特質を端的に表現している。ナロードニキを伝統化するという漠然とした観点に着目すれば、ただ単に共同体社会主義思想を日本に定着させることだけを意味するものとは考えづらい。つまり、竹内好は中野重治の文学における、現状である社会体制について懐疑的な視点を設けて批判を試みることへの重要性を強調したいはずだ。竹内好はそこに中

野重治における文学の優越性を見出し、その姿勢が日本における文学においても特殊性があると言いたかったと考えられる。加えて言えば、魯迅の「掙扎」という觀念が中野重治の文学にも類似した形で成立していたと考えれば、「掙扎」とは中野重治、魯迅、竹内好の三者の文学における姿勢に共通して成立していたという指摘が可能になる。

では、中野重治と竹内好について両者を知る武田泰淳は中野重治及び魯迅についてどのような見解を示しているかを述べたい。まず武田泰淳と竹内好は「中国文学研究会」という組織にて共に活動をしていたメンバーであり、その際に武田泰淳は竹内好から頻繁に叱咤激励をされ二人の関係は一つの師弟関係であることは広く知られていることである。武田泰淳は「L恐怖症」という自らの作品で中野重治と魯迅について直接、言及している。「L恐怖症」という作品の設定は一人のL恐怖症という症候にかかった患者の視点にて展開されており短編小説というよりは武田泰淳自身のエッセイの延長線上に位置するものである。「L恐怖症」の構成自体が魯迅の『狂人日記』との関連があるように思えるが、「L恐怖症」の註にL恐怖症の「L」とは魯迅の頭文字とリテラチュアの意味を含有しているとされており、魯迅とリテラチュア(文学)から怯える患者の告白として成立している。この作品の中で主題となっているのは魯迅の死後についての武田泰淳の感想が主になっているが、武田泰淳の魯迅への認識が受容の域を超えており、もはや畏敬を超えて畏怖すら感じるという心境が綴られている。さらに魯迅の死後、日本ではその精神を文学作品によって体现、あるいは表現する中野重治についても言及されており、魯迅の精神を中野重治が色濃く受け継いでいることを端的に表している。そして、武田泰淳は中野重治についても魯迅に対するよ

うな感情と相似した感情を抱いていることを作品中で述べている。

もう十数年かね。あいつが死んでから、ロジンが死んでからさ、あいつ、ひでえ奴だったかね。とうとう死んじまって、今や聖人に近くなつたし、僕の恐怖心もいくらかうすらいだ。だが想い出すと、どうもいけない、飯がまずくなるんだ。え、君はどうかね、ロジンが生きていることの圧迫か、そんな感じないかね。(中略) ナカノジュージとかいううるさいの生きているが、こりや中国文学じゃなしね。だから僕は大きいに彼を記念するよ。ああ、かまうことない、耳も割れんばかりに大声も発しりゃいいんだ。ロジンの精神は永久に生きる！(傍点武田)<sup>(16)</sup>

このことから武田泰淳の中野重治と魯迅に対する畏敬を通り越した畏怖が感じられる。さらに武田泰淳は「魯迅と中野重治」で以下のような感想も寄せている。

中野さんの文章を読むと、魯迅を思い出す。すっかり同じだと言うわけではない。魯迅を読むと中国の知識人が好きになるが、中野重治を読むと、日本の知識人にもいいところがあるなと思う。この二人は生きているだけで、こつちを肌寒くさせる。ぬるま湯につかるうとしていなのに、氷の棒が焼火箸を突き出されたようで、安閑としていられなくなる。こつちが甘ったれた気分ではいるときは、憎らしくなる存在、こつちが絶望しているときはたのもしいな奴なのだ。ときどき、心の狭い田舎者めと見下げてやろうとするが、妙に

文化の精髓をつかまえているらしく、かえって見上げなければならぬ結果になる。魯迅、重治も、はたして小説家であるかどうか、これはわかりにくいことだ。ともかく、まちがいに文学者であつて、スキライのひどいがんこ者だ。私は、彼のような文学者が日本に生存してしてくれたことを、神か仏に感謝したい<sup>(17)</sup>。

以上のような点で武田泰淳は中野重治と魯迅について深い畏敬の念を抱いていたことが確認できる。武田泰淳の魯迅受容に関しては武田泰淳の『ひかりごけ』が魯迅の『狂人日記』から強い影響の基で執筆されていることは明らかなことではあるが<sup>(18)</sup>、「L恐怖症」にて表現されている武田泰淳の魯迅観は畏怖すらうかがえるほどであり、武田泰淳は魯迅に畏敬を示すだけでなく、絶対的に超克できない偉大な存在として受容していたと考えられる。

では、前出の三者である中野重治、竹内好と武田泰淳の魯迅受容の共通点について述べたい。三者に共通しているのは、共に魯迅への深い畏敬の念を表しており、まずその点で三者の見解が一致していると言える。中野重治の魯迅受容は前述したが、今回、中野重治における魯迅受容の尺度として取り上げたのが竹内好と武田泰淳だが、竹内好の魯迅受容は先行研究において深く研究されており、その成果は広く紹介されている。そして、それにより日本や中国を含める東洋における普遍的な観念の抽出に成功を取っており、高い評価を様々な側面で得ている。竹内好は魯迅から形而上学的な観念を受容しており、その代表的なものが前出の「掙扎」である。それは中野重治、魯迅、竹内好に共通した観念であると言える。そして、もう一方では武田泰淳だが、武田泰淳の魯迅

受容は中野重治と竹内好と同様に魯迅への深い畏敬がうかがえるが、武田泰淳の場合は畏敬を通り越して畏怖すら感じているほどであったと言える。武田泰淳は中野重治と同様に作家であり、武田泰淳の文学観の生成において魯迅からの影響は無視できないものがあるが、それが直接的に作品の中に見られるものは少ない<sup>19</sup>。その原因として武田泰淳の魯迅受容がすでに畏怖の領域に踏み込んでおり、武田泰淳は自らの作品でそれを表現することが困難であったのである。「掙扎」という觀念においても作品中でそれが直接的に表現されているのは『ひかりごけ』が指摘できるが、『ひかりごけ』の構成は戯曲的であり、「掙扎」の表現手法が直接的でなく作品においてその觀念の表現が滑らかでない。さらに武田泰淳の魯迅受容は浦和高校時代に親しんだ中国文学に始点があり、魯迅については間接的受容であったことが指摘できる。ここに武田泰淳の魯迅受容における一つの限界が見て取れる。

以上、本論が見てきた点を踏まえると中野重治の文学が魯迅の精神的な側面から多大な影響を受け成立しており、その点が中野重治文学の特殊性として表出していると言える。

今後の課題として、中野重治の研究動向として上記のように先行研究があまり重視してこなかった同時代の作家や文学者との差異を分析し、なおかつ中野重治の魯迅受容、中野重治と魯迅との差異を理解していく必要性はあると思われる。中野重治の魯迅受容を研究することにより自身の作家としての姿勢を多角的に分析することとなり、プロレタリア文学やマルクス主義からの転向における問題について先行研究からは異なった視点でその問題について考察することが可能となる。そして、その比較の対象が中国で活躍した魯迅であることにより、日中間における

共通の問題の捉え方における差異や、その時代における日中の歴史認識について新たな側面が見られるのではないだろうか。

## 終わりに

中野重治と魯迅を中心に論じてきたが、本論文で介在とした竹内好と武田泰淳以外の作家、文学者との比較や、あるいは哲学の領域にまで踏み込んで中野重治の研究をすることは必要だと思われる。今日的には中野重治をはじめとする日本のプロレタリア文学は昭和時代の終焉と共に、現在では完全に風化し人々から忘却されていると言える状況である。文学は国家を維持して国民という意識を喚起させる媒体として現在でも機能しているものであり、そのような点を肯定的に捉えて広範に文学が読まれていくことは重要性が高いと言える。日本の近代から現代への移行期にあたる時代の文学が再発掘、再評価されていくことで混乱を極める現代社会においてこそ日本を生きた先人達の情熱を我々も理解し、受けとめていくことは一つの義務として忘れてはならないことであると思う。中野重治と魯迅の文学には国境を越えて、近代という一つの時空間に跨るアポリアに果敢に立ち向かった両者の悽愴な生涯が投影されている。完全に近代化された現代を生きる我々は注意していないことのような先人達の苦悩すら忘れてしまうものであるが、それは決して忘れてはならない大事な要素だと思おうのである。

〔注〕

- (1) 佐々木基一は「中野重治」(平野謙(編)『中野重治研究』筑摩書房一九六〇年)において中野重治の作品における転向について論じている。
- (2) 小田切進(編)『日本近代文学大事典第二巻』講談社 一九七七年 五一七ページを参照
- (3) 本多秋五『第三版 転向文学論』未來社 一九八五年を参照
- (4) 汾浩介「梨の家」の「村」と「家」 汾浩介・大牧富士夫・岡田孝一・清水昭三(著)『研究 中野重治』神無書房 一九七四年を参照
- (5) 堀田善衛「良平と重治―『梨の花』中野重治―」堀田善衛『彼岸繚乱 忘れぬ人々』筑摩書房 一九八〇年を参照
- (6) 河口司「日本文学における中野重治」河口司『中野重治論』オリジン出版センター 一九七八年を参照
- (7) 藤森節子「(彼も転向しました)魯迅―中野重治と魯迅―」『雑談 第四十一号』一九九九年七月を参照
- (8) 竹内栄美子「魯迅への視線―中野重治の魯迅論―」竹内栄美子『批評精神のかたち 中野重治・武田泰淳』イー・ディー・アイ 二〇〇五年を参照
- (9) 「魯迅先生の日に」の冒頭で中野重治自身が講演のタイトルが手ちがいから定まったもので、ただ単に新日本文学会員の一人として魯迅について言及する旨を記した前置きがある。
- (10) 中野重治「魯迅先生の日に」中野重治『中野重治全集第二十巻』筑摩書房 一九七七年 六二九ページから引用
- (11) ベネディクト・アンダーソン(著)白石さや・白石隆(訳)『増補 想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』NTT出版 一九九七年
- (12) 竹内好『魯迅』未來社 一九六一年
- (13) 注12と同文献 十二―十三ページから引用
- (14) 西洋の自民族中心主義に基づく東洋への進出に伴う、文化、思想等の流入を意味する。
- (15) 竹内好「思想家としての中野重治」平野謙(編)『中野重治研究』筑摩書

房 一九六〇年 三十一―三十二ページから引用

- (16) 武田泰淳「L恐怖症」武田泰淳『武田泰淳全集第一巻』筑摩書房 一九七一年 二二三―二三四ページから引用
- (17) 武田泰淳「魯迅と中野重治」武田泰淳『武田泰淳全集第十三巻』筑摩書房 一九七二年 三五八ページから引用
- (18) 兵藤正之助は「泰淳と魯迅―『北京の暗黒』と『東京の暗黒』にみなぎる秋霜の気」(兵藤正之助『武田泰淳論 昭和史に閃爍する作家』冬樹社 一九七八年)において、両作品の因果関係を指摘している。
- (19) 「武田泰淳全集」所収の魯迅関連文献は「L恐怖症」、「ひかりごけ」、「魯迅とロマンティズム」、「魯迅と中野重治」、「魯迅とは何者なのか」、「魯迅死後三十年に思う」、「魯迅先生と私」と竹内好との対談「薇を喰わない―魯迅文学をめぐる―」があるが数値から考察して中野重治の魯迅関連文献と比較して少ないことが指摘できる。

〈主要参考文献〉

- 小川重明『中野重治拾遺』武蔵野書房 一九九八年
- 桶谷秀昭『中野重治 自責の文学』文藝春秋 一九八一年
- 小田切秀雄『中野重治―文学の根拠から』講談社 一九九九年
- 亀井秀雄『中野重治論』三一書房 一九七〇年
- 河口司『中野重治論』オリジン出版センター 一九七八年
- 北川透『中野重治 近代日本詩人選15』筑摩書房 一九八一年
- 木村幸雄『中野重治論 詩と評論』桜楓社 一九七九年
- 小林広一『中野重治論―日本への愛と思索』而立書房 一九八六年
- 杉野要吉『中野重治の研究 戦前・戦中篇』笠間書院 一九七九年
- 竹内栄美子『批評精神のかたち 中野重治・武田泰淳』イー・ディー・アイ 二〇〇五年
- 竹内好『魯迅』未來社 一九六一年
- 武田泰淳『武田泰淳全集第一巻』筑摩書房 一九七一年

- 武田泰淳『武田泰淳全集第十三卷』筑摩書房 一九七二年  
中野重治『中野重治全集第二十卷』筑摩書房 一九七七年  
日本文学研究資料刊行会(編)『日本文学研究資料叢書 中野重治・宮本百合子』  
有精堂出版 一九八一年  
兵藤正之助『武田泰淳論 昭和史に閃爍する作家』冬樹社 一九七八年  
平野謙(編)『中野重治研究』筑摩書房 一九六〇年  
汾浩介・大牧富士夫・岡田孝一・清水昭三(著)『研究 中野重治』神無書房  
一九七四年  
堀田善衛『彼岸繚乱 忘れ得ぬ人々』筑摩書房 一九八〇年  
本多秋五『第三版 転向文学論』未來社 一九八五年  
松下裕『評伝 中野重治』筑摩書房 一九九八年  
満田郁夫『増訂 中野重治論〈近代文学研究双書〉』八木書店 一九八一年  
(とさ けいじ・城西国際大学修士課程人文科学研究科国際文化専攻)